おまけ小説

「トシデンセツ・フラグメント」　作・朱時卍時

赤く染まった海が低い唸りを上げていた。昼間は初夏らしい爽やかな天気で、窓を開けた教室に流れ込む風は程よく涼しく、空には雲のひとかけらもなかった。なのに生徒会の仕事を終えて下校時間になったころには進路を変えた台風の影響ですっかり天気は崩れていた。糸状に千切れた雲が渦を巻き、空や海は夕焼けで禍々しいほど赤く染まり、これでもかというほど湿気を含んだ不快な潮風が海沿いの下校路を一足早くねり歩いていた。木村サキは汗で黒くなったシャツの端を針のような指先でつまんで広げた。焼け石に水だと思いながらも、学校指定の薄っぺらいシャツをはためかせ、空気を制服の内側へ送り込む。汗は引かず、湿気があるのに喉は乾く一方だった。

普段なら「ショボイ・セコイ・ウザイ」と三拍子で吐き捨てる学校近くのコンビニ「さんとす」のコーラをいくらか恋しく思いながら、サキは短くなった髪を掻き上げた。指の隙間から風が潜り込み、地肌から熱が抜けて心地いい。陸上部の方針で半ば無理やり切らされた髪も、こういう時は案外悪くないと感じられる。

慣れたのだ。

ーー髪は女の子の命なの。

ーーサキは素敵なお嫁さんになるの。

ーーほら、このお相手の方は長い髪が好きなんですって。

髪の毛を伸ばし、綺麗に整えることが当たり前。

女の子は許嫁の好みに沿うような容姿に近づけること。

古臭いと思いながらも、そうすべきだと教え込まれてきた。

父親も母親も、サキ自身もそれが当たり前であると信じ切っていた。

だが、幸か不幸かサキの入学した女子校では陸上部は髪を切る伝統があった。髪を切り、切った髪を近所の神社に願掛けで奉納する。神前に立って髪を納め、幣を振りかざされた時。頭を垂れ、古びた神社の床の染みを見つめながら、それまで信じていたものがバラバラになり、形を失っていく気がした。その晩は黙って髪を切ったのを両親からこっぴどく責め立てられた。サキは神主から渡されたお神酒で酔っぱらってぼやけた頭で、怒ったり泣いたり千変万化する両親の表情をどこか他人事のように眺めていた。後日、親を泣かせてしまったこともあって多少の罪悪感も抱いたが、サキは心の奥底で透き通った開放感を感じていた。そして次第にその透き通った開放感の方が大きくなって、罪悪感なんて消し飛んでしまった。

慣れというのは恐ろしい。

慣れることが良いことなのか、悪いことなのか。

慣れてしまってからではひどく曖昧になってしまう。

両親が正しいと思っていた自分も、今感じている開放感も。

どちらも時の流れの中で連続した同じ自分だ。

それなのに、「慣れ」ていくことでこうも別人のようになってしまう。

このまま家族やこの町の空気や風習に慣れていくのは果たして良いことなんだろうか。
湿った空気を纏いながら、サキはそんな答えの出なそうなことをぼんやりと考えていた。
考えていたから、道の真ん中に人がいるのも気がつかなかった。
あうっ。突然眼前に現れた肉壁に押し返され、体がよろめく。
すみません。と反射的に謝るも反応はない。ぶつかられた小太りの男はサキに目をやるどころか、額に脂汗を浮かべ、道沿いの今にも崩壊しそうなバラック小屋を見つめている。閉店して久しい釣具屋だ。入り口のガラス戸は割れ、一面に新聞紙をガムテープで貼り付けてある。
釣りでもしにきたのだろうか。
そう思って、少し先に大きい釣具屋があるよ、と声をかけようとした矢先、男は足早に去っていった。
はて何だったのだろう、と小首をかしげ、サキはなんとはなしに崩れかけの小屋へ目をやった。と同時に、男が立ち止まっていた理由に気づく。
小屋の中からボソボソと声がしていた。小さくて篭っているが、それは若い女性の声のようだった。その声がどこか悩ましくて、サキの足は吸い寄せられるようにガラス戸へ近づいていた。貼り付けられた新聞紙のそばに顔を近づけてみると、その声の輪郭がはっきりと伝わってきた。
乱れた息。堪えるような声。ぴちゃぴちゃと細かに響く水音……。
割れたガラス戸一枚挟んだ向こう側にいるであろう女性の火照った体温までもが感じられそうで、サキの頬は熱くなった。

「……んぁっ♪　んみゃぁ♪……んんっ♪　ふぁあっ♪」

途切れ途切れに聞こえる女の子の甘い声。いくら古臭い家庭で育ち、世間に疎いサキにもそれが何かおおよその察しくらいはついた。
この近くにはろくにラブホテルもなく手近な廃屋にしけこんで仲良くしているカップルが結構いる、という話は聞いたことがある。それがこんな身近で行われているとは考えてもみなかった。これ以上ここにいるのも野暮だと思い、その場を立ち去ろうとした。
拍子に新聞紙の隙間から、中にいる女の子の姿がチラリと見えた。輝かんばかりの金髪。幼い顔立ち。どう見てもランドセルを卒業したばかりの小さな女の子が、ブラウスをはだけ、自分の割れ目に指を這わせて瞳を潤ませている。
サキは訳もわからず瞬間沸騰しそうになった顔を伏せ、動揺で体が震えるのを押さえつけた。見てはいけないものを見てしまったのではないかという困惑と、年上の自分が注意しなくては、という妙な正義感のようなものが混ぜこぜになって込み上げてくる。とはいえ、注意するにしても、どう注意したら良いものかまったく考えが浮かばなかった。普段、生徒会の仕事で髪型や服装の乱れ程度のことを注意することはあっても、さすがに自慰を注意したことはない。
動揺せずに毅然とした態度で注意することができるだろうか。
そもそも小さな子とはいえ、他人のこんなプライベートなことを注意するのはお節介ではなかろうか。
知らないふりをして中に入ってしまえば、向こうも気まずくてやめるだろうか。
逡巡した挙句、出たとこ勝負に身を任せてしまおうと戸へ伸ばした手がぴたりと止まる。

「……ほら、指だけじゃもの足んないんじゃない？　コレあげるから使いなさいよ……」

金髪の子とは別の女の声がした。

「……これ……使わなきゃだめ？」

「……自分の立場わかってる？」

「ぅうっ……」

とたんに女の子の声に涙が混じる。

新聞紙の隙間に瞼を近づけ、できる限り深く覗き込んでみる。

「ほら、あたしのことが好きだったんでしょ？　受け取ってくれるよねえ？」

サキと同じ制服を着た茶髪の女の子が側に立ち、アルトリコーダーを彼女の首に突きつけていた。

好き？　女の子同士で？

今まで遭遇したことのない展開に困惑し、止めなくてはいけないという気持ちもろとも、サキの頭の中は真っ白になった。

「これ、欲しかったんでしょ？　取り違えたとか言ってわざわざ持ってってさぁっ」

「ちがっ、そんなんじゃ……」

「たまたま間違えて持ってったっていうの？　信じられない。トシデンセツとかいう気持ち悪い病気持ちだから可哀想に思って一緒にいてあげたのにさぁ……」

「……ごめんなさい」

「ほら、そう思うならこれでシてくれるよね。あんたの動画、高く売れそうだしさぁ。そうしたら明日からまた友達ごっこしてあげる……」

「うぅ……シィちゃん……」

金髪の子は震える腕をゆっくりと伸ばし、リコーダーを受け取った。

「……くちゅっ♪ んぁっ♪ くちゅっ♪ にゃあぁあっ♪ んぁっ♪　はぅっ♪……くちゅっ♪」

小さな手で握られたアルトリコーダーの鈴口が彼女の秘部に押し当てられ、ぬらぬらと怪しく光っている。赤く染まった頬、濡れた唇、熱い吐息、乱れていく髪。微熱を帯びた白い肢体が、薄闇の中でよじれている。遠くで唸る波を打ち消すほどの水音が、サキの耳元を撫であげる。生暖かい潮の香りに混じって、彼女の匂いが、サキの鼻先まで漂ってくる。知らずうちに口元に溜まっていた生唾を、サキは音がしないように密かに飲み下した。乱れていく彼女の姿を覗くうちに、サキの体もまた火照り、下腹部に切なさが満ちていく。お腹の奥が疼き始め、秘部がじんわりと濡れていく。滲み出た愛液がショーツのおりものシートに触れて、冷たい感触に変わっていく。

「んぁっ♪　あぁっ……」

自分もショーツの上から指先で秘部をなぞってみたい欲求がむくむくと湧いてくる。
人形のように美しい金髪の少女は蕩けた瞳で口をだらしなく開き、よだれを垂らし、淫らな喘ぎ声を漏らし続けている。割れ目に対して大きすぎるリコーダーを苦悶とも快感ともとりかねる表情で一心不乱に動かしている。彼女の愛液がリコーダーの内側をつたい、息の抜ける穴からぴちゃりとはねる。
鼓動が乱れ、胸元がカァッと熱くなる。息が自然と荒くなる。指先がスカートのポケットに伸び、ポケット越しにショーツを触ろうとして、サキの体はバランスを崩してしまった。

「にゃわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

半壊していた釣具屋のガラス戸を突き破り、サキは血まみれで金髪少女の前に倒れ込んだ。
露出した肌という肌に、砕けたガラスが突き刺さる。

「うわぁぁぁぁ、何やってんの！　あんた大丈夫！？」

意外にも茶髪の女の子が駆け寄って、サキの体を起こしあげる。
金髪の子は突然の事態に動揺しているのか、リコーダーをどこへやるでもなく宙で無意味に上下に動かしている。

「だ、大丈夫じゃないけど……『なにやってんの！』はこっちのセリフ！　……だ！」

頬に刺さったガラス片の痛みで当初の目的を思い出したサキは、できる限り強い口調で茶髪の子に言い放った。血塗れの形相で凄んだこともあったのだろう、女の子は謝るでもなく怯えた表情で逃げ出した。

「きみ……大丈夫？」

金髪の女の子を不安にさせまいと、精一杯の笑顔をつくってみせる。

「……血塗れで怖いんだけど……あなたこそ……大丈夫？」

金髪の子は握りしめていたリコーダーを放り投げ、サキにハンカチを手渡した。
体がくねくねと伸びた猫があしらわれたタオルハンカチ。お気に入りのものなのか、ハンカチの隅には名前と思われる刺繍がされていた。

ーーマリ

可愛らしいハンカチで血を拭き取るのを躊躇いながら、サキはなんとなくその名を心の中で呟いた。やがてこの名で彼女を呼び慣れる日が来ることを、この時のサキにはまだ想像もできなかった。